

スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究 (第6報)

——コスタリカ共和国における野球ボランティア活動 5年間の総括——

宮 崎 光 次

要旨

「JICA 桜美林大学連携事業『コスタリカ共和国野球振興支援ボランティア連携』の第5回活動として、2020年2月3日から3月2日までの1ヶ月間、本学野球部員13名がコスタリカ共和国（以下、コスタリカとする）に派遣され、野球の普及・振興に関わるボランティア活動を行った。

2016年の第1回活動では1,222名、2017年の第2回活動では1,630名、2018年の第3回活動では1,883名、2019年の第4回活動では1,996名、そして今回の第5回活動では、1,987名に対して指導を行い、5年間で延べ8,718名となった。

この活動を通して、コスタリカの子ども達に野球というスポーツを知ってもらうことができたこと、少しずつではあるが野球チームへの参加者が増えていること、さらに、道具を大切にすることやグラウンド整備を行うことなどが徐々に定着してきたことは大きな成果と言える。

また、この活動を通して、学生の語学力を含めたコミュニケーション能力・プレゼンテーション能力が向上したこと、さらに、JICA長期派遣隊員となる者が出るなど、国際貢献、多文化共生などグローバルな視点で物事を考える学生を多く輩出できたことは大きな成果といえる。この活動は、スポーツによる国際貢献及び本学の建学の精神である「学而事人（がくじじじん）」（学びて人に仕える）の実践であり、グローバル人材育成のために大いに役立ったと考えられる。

キーワード：野球、コスタリカ、グローバル人材、JICA、国際貢献

はじめに

桜美林大学は、独立行政法人国際協力機構（通称 JICA、以下 JICA とする）と連携ボランティア派遣事業実施で合意し、2016年から2020年の5年間、毎年1ヶ月程度、野球部員10～15名をコスタリカに派遣し、野球の普及・振興に貢献するとともに、ボランティ

ア経験を通じてグローバル人材の育成を図ることとなった(宮崎光次 [2016])。

第1回活動(2016年2月4日から3月4日までの1ヶ月間)では、体育教員養成大学での野球講習会や子ども達との野球教室を通して普及・振興活動を行った(宮崎光次 [2017a])。

第2回活動(2017年2月7日から3月6日までの1ヶ月間)では、コスタリカ人教員自らが、授業の中で指導できるよう JICA 中南米ベースボール型授業促進セミナーを開催した(宮崎光次 [2018])。

第3回活動(2018年2月5日から3月5日までの1ヶ月間)では、新たな道具の作成と地方都市での野球普及活動に注力した(宮崎光次 [2019])。

第4回活動(2019年2月4日から3月4日までの1ヶ月間)では、小学校を訪問してのベースボール型授業に最も力を注いだ(宮崎光次 [2020])。

今回の第5回活動(2020年2月3日から3月2日までの1ヶ月間)では、これまでの活動同様、技術と共に礼儀や感謝の気持ちも持つことを伝えた。加えて、指導者講習会を多く企画し、指導者の育成に主眼を置いた。

本研究の目的は、第1回から第5回の5年間の活動が、コスタリカでの野球振興に繋がったか、また、本学学生のグローバル人材の育成に繋がったかを検証し総括することである。

第1章 活動の目的、期待される成果と活動内容

2015年に「JICA 桜美林大学連携事業『コスタリカ共和国野球振興支援ボランティア連携』」で締結された活動の概要は以下のとおりである。

【活動目的】

- 1) JICA が行うボランティア事業に、グローバル人材育成を目指す本学の知見・人材を有効に活用し、コスタリカにおける野球の普及・振興を図る。
- 2) JICA ボランティア経験を通じた大学のグローバル人材育成及び国際協力分野における人材育成を図る。
- 3) 2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた国際貢献策「Sport for Tomorrow」の具体的な行動として実施し、スポーツの価値とオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの拡大を図る。

【期待される成果】

- 1) 野球を通じたコスタリカ共和国の青少年の健全な育成
- 2) コスタリカの野球競技力向上
- 3) コスタリカにおける野球競技者の底辺拡大
- 4) 活動を通じた学生等の育成
- 5) 学生等の異文化理解の促進、及び、グローバル人材の育成

6) スポーツとオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの拡大

【活動内容】

- 1) 選手への技術指導
- 2) 選手へのルール、マナー等の指導（協調性、忍耐力等を身につけ、青少年の心身の健全育成を目指す）
- 3) 普及を目的とした青少年を対象とする野球教室
- 4) 試合によるデモンストレーション
- 5) 試合・大会の運営支援（審判、グラウンドキーパー等を含む）
- 6) 清掃等の活動
- 7) 指導者への指導（技術、指導法）
- 8) コスタリカ代表チームへの支援
- 9) 体育専攻大学生への指導（技術、指導法）

次章以降では、上記【期待される成果】で挙げた項目を基に、5年間の活動成果を検証していく。

第2章 コスタリカにおける野球の普及・振興に関する活動成果

1 野球を通じたコスタリカ共和国の青少年の健全な育成

(1) サントドミンゴ野球協会での活動

派遣受け入れ先であるサントドミンゴ野球協会に所属している子ども達（就学前の子どもから高校生まで）に対して野球指導を実施した。活動は、毎週2回2時間30分程度の練習と週末の試合である。通常は、JICA長期隊員1名で行っているが、派遣された本学学生も加わり、チームとして指導した。活動では、野球の技能向上と共に、試合前の挨拶（写真2-1）など礼儀、規律を重んじること、ルール、マナーを守ることを重視した。また、楽しむこと、考えること、チャレンジすることを常に意識するよう練習前のミーティングで確認した（写真2-2）



写真 2-1 試合前の挨拶



写真 2-2 練習前のミーティング

(2) グラウンド整備, 道具のメンテナンスの定着

コスタリカのグラウンド環境, 特にグラウンド表面の状態は悪い。グラウンド整備をするという習慣がないため, 表面がデコボコでイレギュラーバウンドが頻繁に起こる。怪我防止やより高度なプレーをするためにもグラウンドの整備が必要である。そのため, 現地でトンボ(グラウンド整備用具)を作成, 日本からも篩(フルイ)を持参し, 学生が率先し, 子ども達と共に整備を行った。定着とまではいかないが, 徐々に参加する子ども達が増えた。

また, コスタリカでは, 野球道具はあまり流通しておらず, 道具不足は深刻である。道具はインターネットショッピングを通じて海外から購入しているが, コスタリカでの野球道具の経済的な価値は日本の約5倍である。しかし, 彼らはこれを大事にしない。そこで, 道具の貴重さを伝え, グローブの磨き方などメンテナンス方法を紹介した。これについては, 習慣が身についた子ども達もいる。今後, さらに多くの子ども達に広まるよう期待している。

2 コスタリカの野球競技力向上

(1) 試合結果と強化対策

第1回活動(2016年) 3勝1敗

第2回活動(2017年) 4勝0敗

第3回活動(2018年) 2勝0敗

第4回活動(2019年) 4勝1敗

第5回活動(2020年) 6勝0敗

5年間の対戦成績は, 桜美林大学の19勝2敗である。毎年メンバーが異なるため強化の促進があるか否かの結論は出せないが, 目に見えて強くなったという印象はない。

しかし, 近年ではコスタリカ代表チームを年齢別に編成し, 時間を掛けて強化に乗り出している。

短期間に結果を出すことは難しいが, この取り組みが必ずトップチームの強化, そして, 底辺拡大に繋がると思う。子ども達が憧れる選手を育て, 夢を与えるナショナルチームにしていくことが, 競技人口を増やし, ひいては選手強化に繋がるだろう。

(2) 指導者研修会の実施

指導者のレベルアップは, 選手, チームのレベルアップに直結する。そこで指導者の能力向上, および, 人材育成のために指導者研修会を実施した。

キャッチボール, トスバッティングなど基礎スキルの指導方法を中心に提案し, 実技を交えながら研修を行った。また, 安全に配慮したグラウンドの使用法, 野球道具の管理方法(バット, ボール等の使い方と置き場所)についても指導した。

3 コスタリカにおける野球競技者の底辺拡大

(1) 指導した人数

第1回活動から第5回活動までの指導した人数の推移を表2-3にまとめた。

第1回活動で1,222名、第2回活動で1,630名、第3回活動で1,883名、第4回活動で1,996名、そして今回の第5回活動で1,987名に対して野球指導を行い、5年間で延べ8,718名に指導した。地道な活動であるが、野球の普及、競技人口増加に繋がり底辺拡大に役立ったと考えられる。

表2-3 指導した人数の推移

項目	第1回活動	第2回活動	第3回活動	第4回活動	第5回活動	
	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	
サントドミンゴ野球協会での野球指導(野球教室)	262名	238名	484名	649名	469名	
地方都市小学校でのベースボール型授業および野球教室	ラクルス野球教室	57名				
	サンカルロス小学校授業	103名	42名			
	ウバラ野球教室		20名		191名	
	リモン小学校授業			42名		
	リモン野球教室			22名	21名	
	ボコシー野球教室-				30名	
都市部(サンホセ周辺)小学校でのベースボール型授業	648名	497名	1,102名	1,077名	576名	
親善試合	親善試合	92名	70名	93名	97名	549名
大学での野球授業・日本語授業	UNA・UTN	60名	50名	98名	122名	74名
小学校教員向けベースボール型	教員		327名			
授業研修会	小学生		428名			
指導者研修会	コーチ				128名	
合計	1,222名	1,630名	1,883名	1,996名	1,987名	
前年比	100%	133.40%	115.50%	106.00%	99.54%	
2016年比	100%	133.40%	154.10%	163.30%	162.60%	

〔出所：著者作成〕

(2) 小学校におけるベースボール型授業の普及

毎年、首都サンホセ、および、その近郊の小学校を訪問しベースボール型授業(写真2-4)を実施、5年間で延べ2,102名が野球の魅力を味わった。

活動に参加した本学学生が指導案を作成した。指導案は、年々改善され、第4回活動からは、導入、展開、まとめと分け、各々のパートを数名の学生が担当、スペイン語で指導できるよう、声掛け、指示等も記載し、充実した内容となった。

また、授業の最後に、近隣の野球チームの存在を知らせ、授業以外にも野球をプレーする機会があることを伝えた。その成果として、数名ではあるがサントドミンゴ野球協会チームに新たなメンバーが加わった。

(3) 地方都市での野球の普及

ニカラグア国境の町ラクルス、カリブ海沿岸の都市リモンなど、地方都市を毎回訪れ、ベースボール型授業を実施した。また、野球協会に参加を呼び掛け、子ども達の野球教室

を実施した。

地方都市は貧困な地区が多く、野球道具が全く整っていない。そこで、本学をはじめ、ファンケル、全日本軟式野球連盟、アシックスから提供いただいたグローブ、ボールなどを持参し、全て、小学校や野球協会に寄贈した（写真2-5）。



写真2-4 屋内施設での授業風景



写真2-5 用具の寄贈

(4) 野球用具の作成

地方都市はもちろん、コスタリカ国内の野球用具不足は深刻である。そこで、毎年の活動で、テーマを決め、指導時間の合間を利用し、①手作りバット ②手作りT台 ③トンボ（グラウンド整備用具）④集球ネット ⑤バットケース を作成、寄贈した。これらはいずれも部材を現地で調達し、現地で製作した。

これにより、小学校での授業や野球教室で一度に多くの子ども達が活動できるようになった。

(5) 大学生を対象としたベースボール型授業普及活動

5回全ての活動でコスタリカナショナル大学（通称：UNA）を、第3回から第5回の活動でコスタリカ工科大学（通称：UTN）を訪れ、ベースボール型授業普及のための活動を行った。

本学学生がキャッチボール、ゴロ捕球、フライ捕球、バッティング練習などを指導し、試合も行った。コスタリカナショナル大学体育専攻学生の多くが将来教員になるため、是非、ベースボール型授業の普及に貢献して欲しいと思う。

第3章 グローバル人材育成及び国際協力分野における人材育成に関する活動成果

1 活動を通じた学生の育成

(1) 活動に参加した学生数

第1回活動から第5回活動までに参加した学生は延べ51名である（表3-1）。

このうち3名が第1回活動、第2回活動の両方に、2名が第2回活動、第3回活動の両方に、1名が第2回活動、第4回活動の両方に、1名が第3回活動、第4回活動の両方に、1名が第3回活動、第5回活動の両方に参加した。このように複数回参加する学生がいることにより、活動内容、課題等が継承され、系統性のある活動になった。

また、2回目の参加となる学生は、スペイン語にも慣れていること、コスタリカに関する知識があること、既に知っているコスタリカ人がいること、活動内容を理解していることなどから、積極的に活動しリーダーシップを発揮してくれた。

表3-1 活動に参加した学生数

	第1回活動	第2回活動	第3回活動	第4回活動	第5回活動
	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
4年生	1	3 (うち3名は2回目)	0	3 (うち2名は2回目)	2 (うち1名は2回目)
3年生	8	2	6 (うち2名は2回目)	0	6
2年生	0	6	4	5	6
合計	9	11	10	8	13

〔出所：著者作成〕

(2) 活動に参加した学生の進路 (就職・進学)

活動に参加した学生のうち2016年3月に1名、2017年3月に8名、2018年3月に2名、2019年3月に11名、2020年3月に5名、合計27名が卒業した。

卒業後の進路は、以下の通りである。

- 1) JICA 海外協力隊員1名 (2017年)
- 2) 教員3名 (2018年1名=専任教員, 2019年2名=非常勤教員)
- 3) 一般企業15名 (2017年4名, 2018年1名, 2019年6名, 2020年4名)
- 4) 起業1名 (2019年)
- 5) 大学院進学6名 (2016年1名, 2017年3名, 2019年1名, 2020年1名, うち2名はスポーツ国際開発学専攻)
- 6) ワーキングホリデー1名 (2019年)

このうち、JICA 海外協力隊長期派遣隊員となった卒業生、アスリートによる社会貢献を目的に設立した法人に就職し外国人のアテンドなどに携わっている卒業生、さらに、留学したいと考えている学生のサポートをする事業を立ち上げた卒業生もおり、コスタリカでの活動が直接的にその後の進路に反映している。

27名の卒業生を業種別に見てみると (JICA 海外協力隊員を非営利、教員を学校・塾、起業およびワーキングホリデーをその他として集計)、建築・不動産業2名 (7.4%)、製造業1名 (3.7%)、電気・ガス1名 (3.7%)、輸送2名 (7.4%)、金融・保険3名 (11.1%)、情報通信1名 (3.7%)、医療・福祉1名 (3.7%)、学校・塾3名 (11.1%)、サービス3名 (11.1%)、協同組合・郵便・非営利2名 (7.4%)、その他2名 (7.4%)、大学院進学6名

(22.2%)となる。

大学院進学率は、本学全体では3.7%（2019年3月卒業生）であり、参加学生の22.2%という数字は特筆すべき結果である。

(3) 着任式、夕食会と報告会

①在コスタリカ日本大使館での着任式と夕食会

毎年、活動2日目に在コスタリカ日本大使館を訪問し、着任式を行った。また、活動終了2日前には1ヶ月に渡る活動の報告会を兼ねた夕食会に招待され、大使をはじめ大使館職員の面々と談笑しながら、コスタリカでの活動を振り返った（写真3-1）。

学生にとって、大使館を訪れる機会はめったにない。大使をはじめ職員の方と話すことは異世代の方と交流する非常に貴重な機会であり、視野が広がったと思う。

②活動報告会

・野球連盟、野球協会報告会

毎年、活動終了2日前にコスタリカ野球連盟、サントドミンゴ野球協会の関係者の出席のもと、報告会を行った。第4回活動では、通訳を交えずスペイン語のみで行った。パワーポイント（全てスペイン語で作成）を利用したプレゼンテーションは決して流暢とは言えないものの、質疑応答も含め最後までスペイン語で報告することが出来た。

・JICA 帰国報告会（コスタリカ）

毎年、活動終了前日にJICA 帰国報告会が開催された。参加者は、コスタリカで活動を行っている長期・短期を含むJICA ボランティア、JICA コスタリカ職員及び専門員である。活動を終える長期ボランティアの方と共に、本学学生はこの報告会で発表の機会が与えられた。

・JICA 帰国報告会（日本）

第1回から第4回の活動では、帰国翌日にJICA 本部にて帰国報告会が行われた。今回（第5回）は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止となった。

上記の各種報告会を通してプレゼンテーション能力が大いに高まった。また、スペイン語を用いての報告など語学力の伸びにも驚くべきものがあった。さらにコスタリカの方、異世代の方への報告はコミュニケーション能力向上にも大いに役立っている。



写真 3-1 在コスタリカ日本大使館での夕食会



写真 3-2 小学校での大縄とび

2 学生の異文化理解の促進, 及び, グローバル人材の育成

(1) ホームステイの実施

毎回, 2泊3日の日程で, 各家庭に1人ずつホームステイを行った。ホストファミリーは, サントドミンゴ野球協会に所属する選手の家族である。コスタリカに滞在して3週目の週末に行われたこともあり, ホストファミリーとも顔見知りで, 野球という共通の話題もあり, 楽しい時間を過ごしたようである。家族と共に小旅行をしたり, ホテルでの生活では分からないコスタリカの家庭での習慣を経験したりと, 異文化理解に大いに役立ったと考える。

(2) 日本文化の紹介と交流

ベースボール型授業のために小学校を訪問した際, けん玉, 折り紙, コマ, 紙風船, 大縄を使って日本の伝承遊びの紹介を行った(写真3-2)。子ども達と共に伝承遊びの時間を過ごすことで, 会話の機会が増え, 語学力向上に大いに役立った。

また, コスタリカナショナル大学の日本語クラスの授業に参加し交流を図った。まず, 自己紹介に始まり, どのようなことを学んでいるかなど互いに質問し合い, その後, 伝言ゲームを日本語, スペイン語を駆使して行った。また, けん玉, 折り紙, コマも一緒に楽しんだ。

同世代ということで, 非常に良い交流が出来た。特に大学生は, 皆英語が話せたのも交流を深めるポイントであったと思われる。

(3) 東京オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの拡大

毎年, 往復路および公式行事参加の際は, チームスーツを着用, 東京オリンピック・パラリンピックのバッジを胸元につけた。また, ベースボール型授業で小学校を訪れる際やコスタリカナショナル大学の日本語クラスを訪れる際はピンバッジを配布すると共に, 東京オリンピック・パラリンピックに関する説明をし, 質問を受け, 少しでも関心を持ってもらえるよう努めた。

おわりに

2016年の第1回活動から2020年の第5回活動を総括すると, 5年間で延べ8,718名に野球の指導を行い, 地道な活動ではあるが, 野球の普及・発展, 競技人口の拡大という点では貢献できたと考える。また, コスタリカ代表チームが年齢別に編成され, 競技力向上のためのシステムは構築できたと思う。残された課題は多いが, 今後の更なる発展が楽しみである。

本学学生の成長という観点では, 延べ51名の学生が参加し, コスタリカでの活動を通し, 異文化に触れ, 理解が進み, 多文化共生の思いが強くなったと思う。

また、日々スペイン語を使うことにより語学力の向上も進んだと言える。チームワーク、リーダーシップを身につけるといっても大いに役立った。さらに卒業後の進路においても、国際貢献に関わる職業に着く者や大学院に進学するものを多く輩出された。

本活動は、スポーツによる国際貢献、「学而事人（がくじじじん）」（学んで人に仕える）の実践であり、グローバル人材の育成は着実に図られたと考える。

コスタリカでの野球支援活動は2020年で一つの区切りを迎えたが、コスタリカからは活動を継続して欲しいとの声が届いていた。また、JICA・桜美林大学でも連携継続の話がある。そうした中、新型コロナウイルス感染症が世界に拡大した。感染拡大がどのように、いつ終息するするのかは不明だが、今後も活動を継続して行きたいと強く思う。

引用・参考文献

- 1) 宮崎光次 [2016] 「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第1報）
－コスタリカ共和国における野球指導－」, 桜美林論考『自然科学・総合科学研究』, 第7号, pp95-112
- 2) 宮崎光次 [2017a] 「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第2報）
－2016年コスタリカ共和国における野球指導－」, 桜美林論考『自然科学・総合科学研究』, 第8号, pp37-50
- 3) 宮崎光次 [2017b] 「コスタリカ共和国におけるベースボール型授業導入の試み」, 桜美林論考『教職研究』, 第2号, pp71-80
- 4) 宮崎光次 [2018] 「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第3報）
－2年間の年コスタリカ共和国における野球ボランティア活動の成果－」, 桜美林論考『自然科学・総合科学研究』, 第9号, pp75-86
- 5) 宮崎光次 [2019] 「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第4報）
－コスタリカ共和国における野球ボランティア活動の成果と学生の成長－」, 桜美林論考『自然科学・総合科学研究』, 第10号, pp17-29
- 6) 宮崎光次 [2020] 「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第5報）
－コスタリカ共和国における野球ボランティア活動の4年間の成果－」, 桜美林論考『自然科学・総合科学研究』, 第11号, pp12-24
- 7) JICA[2018] 「スポーツと開発」事業取り組み方針. https://www.jica.go.jp/activities/issues/sports/ku57pq00002lc8qo-att/policies_sports.pdf, (2020年10月20日現在)
- 8) JICA[2018]2018年度秋募集ボランティア要望調査票：青年海外協力隊 / 海外協力隊 / 日系社会青年海外協力隊 / 日系社会海外協力隊：コスタリカ。
<http://www.jocv-info.jica.go.jp/jv/index.php?m=Info&yID=JL21518B09>, (2020年10月20日現在)